

特集

インタビュー調査の方法と事例

質的研究でのテキスト解釈の問題

高木 廣文

はじめに

看護研究の分野では、インタビューなどにもとづく質的研究が、以前に比べると極めて普通に行なわれるようになったように感じられる。特に大学院の修士論文や博士論文では、多くの研究が行なわれるようになってきた。本稿では、質的研究の主要な問題点について論じようと思うのだが、質的研究とは何かを、まず簡単に説明する必要があるだろう。

まず、ここでは量的研究とは、『素朴实在論にもとづく外部世界の事象を主に対象として、測定にもとづくデータを統計学などを用いて分析することで行なわれる研究』とする。一方、質的研究とは、『心的世界の現象を研究対象とし、それらの現象を言語テキスト化したデータを解釈することで行なわれる研究』としよう。

もともと、人間の心的事象を扱うのが質的研究の本質だと考えられるので、質的研究は看護分野での研究に向いているようである。しかし、他分野の研究者にとっては、未だにそれほどわかりやすい研究方法ではないだろう。特に、実験や調査研究を量的に行なっている研究者にとっては、ほとんど理解不可能かもしれない。最近では、質的研究法と量的研究法を、ひとつの研究テーマで混在して行なうというMixed Method(混合研究法)

も行なわれるようになってきたが、それほど実践例が多いわけではない。この点については、若干私見を述べておいたので¹⁾、今回は質的研究の問題点、特にテキスト解釈について考察したいと思う。

質的研究の問題点といっても、量的研究者から考えた問題点であり、質的研究者にとっては問題とは認識されていないかもしれない。しかし、質的研究の科学性と、その科学性に量的研究者が疑問を呈する理由のひとつとなっている「主観的なテキスト解釈」の問題は重要に思われるので、以下に考えてみたい。

1. 質的研究は科学か？

医学系の研究者のほとんどは、量的研究を行なっているのが普通だろうと思うのだが、そのような研究者が質的研究の発表を聞いたときに、まず思うのは『これは科学的な研究なのだろうか』ということではないだろうか。異なる方法論、似てはいるが異なる専門用語、どう考えても主観にもとづくテキスト解釈など、これまでの経験から大きく外れた研究にとまどいを感じることもだろう。

これらの問題については、すでに議論しているので、詳しくは拙書²⁾を参照いただければと思うが、ここでは極簡単に解説したい。そもそも、『科

学とは何か』ということを確認にしないと議論が始まらないのだが、実はわれわれはきちんと学校で科学とは何かの授業を受けたことがない。少なくとも筆者はそのような授業を受けていない。大学で科学哲学の講義を受けた人は別だろうが、そうでなければ、何となく『科学』という言葉に込められた、または秘められたイメージで、いろいろと感じたり言ったりしているだけだろう。『科学は客観的でなければならない』とか、『科学は因果関係を明らかにする』とか、素朴に考えるのだが、これは定義ではない。ホーキングが指摘するように、良い科学理論とはある現象について、①恣意的な要素を少数しか含まないモデルにもとづいて、大量の観測を正確に説明でき、②これから行なう観測の結果についても確定的な予測ができること、の2点が重要であり必要である³⁾。

このような点から、現実の科学的な営為を上手く表している思想に、構造主義科学論がある^{4,5)}。そのもっとも短い科学の定義は、『科学とは同一性の追求である』というものである。この意味するところは、科学理論はできるだけ少ない恣意的な要素（同一性）を用いて、現象を上手く説明できるものが良いとされる、というものである。例えば、万有引力の法則は、2つの物体間に働く引力を、物が有している特性の内で『質量』という、あらゆる物質が持っている共通する要素、すなわち『同一性』のみを用いて定式化された理論である。極めてシンプルな科学理論であり、アインシュタインの相対性理論が登場するまで、物理学の発展の基礎的な理論であった。

科学理論は現象の説明のみならず、将来に起きる特定の現象について予測ができることも必要とされる。この点から、理論を直接的に証明することは不可能であり、仮に一例でも科学理論に反する現象が観測された場合には、理論の修正や新たな理論の構築が必要となる。これは、われわれが観測できる個々の事象からは、帰納的に理論は検証できないが反証は可能であり、『科学理論は反証可能でなければならない』というポPPERの反証主義の所以である⁶⁾。

科学哲学の理論としては、クーンのパラダイム論も有名である。クーンによるパラダイムとは、①その業績が、他の競合する科学研究活動をして集まる支持者の持続的グループを形成させるほど十分ユニークなもので、かつ、②その業績が、再構成された研究グループに解決すべきあらゆる種類の問題を提示してくれるほど十分発展性のあるものであるとしている⁶⁾。結局、科学研究とは科学者集団が行なっている研究ということになり、専門化された各科学者集団の中で、それぞれのパラダイムにしたがって問題を設定し、それらの解答を与えるという一種のゲームとして科学研究を行なっているといえる。このような立場からいえば、科学者集団の構成員が質的研究をパラダイムにもとづいて行なっているのであれば、当然それは科学的研究ということになる。しかし、この定義はトートロジーであり、科学の定義としてはよくはない。

すでに述べたように、構造主義科学論によれば、科学とは同一性（構造や形式）の追求であり⁵⁾、科学理論（モデル）の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる。自然事象に関する現象については、物質と物質の関係性を記述する理論を持つ分野があり、物理学に代表されるような「厳密科学」と呼ばれることがある。一方では、心的事象をその研究領域に含むような分野では、物理学のようには要因間の関係を定式化することはできないが、言葉によってある概念間の関係を説明する。すなわち、医学領域の大部分、心理学、精神医学などは本質的に非厳密科学であり、看護学も同様に非厳密科学のひとつといえるだろう。

ただし、厳密科学か非厳密科学かは研究対象の本来持っている特性に由来するものであり、ある現象を少数の同一性を用いて構造化する点では、どちらも科学であり優劣はない。すなわち、構造主義科学論の立場では、現象のモデルによる記述は、研究対象によって数式や記号によるとは限らず、言語による記述でも構わないといえる。例えば、アインシュタインによるエネルギーと質量の

関係式「 $E = mc^2$ 」という厳密科学のモデルもあれば、「瞑想はストレスを軽減する」という言説による非厳密科学のモデルもありえる。

構造主義科学論の立場では、目的とする現象の記述に、どのような方法を用いるかは恣意的であり、いくつも対立するモデルがあってもよいとされるが、それぞれのモデルの評価は現実の現象の説明が上手にいくかのみ依存している。したがって、構造主義科学論では、「本当のモデル」や「真実のモデル」の存在を考えないし、同一現象に対して複数の科学理論があってもよいことになる。

2. 質的研究のテキスト解釈について

質的研究で量的研究者からもっとも批判が集中する点に、インタビューなどで得られたテキストの解釈が主観的であるということがあげられる。確かに、テキスト解釈は「主観」以外にもとづくものはないのだが、それが非科学的なでたらめなことを行なっていることには、以下に説明する理由から、ならないと考えられる。

質的研究でよく使われるテキスト解釈の方法に、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)がある⁷⁾。GTAの方法では、テキストを切片化して、コード化して、プロパティ、ディメンションなどを考えながら、ラベルを付けたりすると良い、とは書いてあっても、そのようにすると何故よいのかという、その方法の正当性の根拠は書かれていない。

このテキスト解釈の問題を、言語の心脳構造から考察するために、よくできた人型ロボット、iRobot5が発売された近未来の研究を考えよう。そのiRobot5を自分の秘書のように使って、「新薬の研究をやってデータが出たので解析しろ」と命令して、何百人分かのデータをサーチさせ分析させたとする。すぐに「新薬は標準薬よりも有効です。統計学的には3%の確率で有意でした」と答えたでしょう。このような場合、「おまえのロボットは適当なことを言っているんだろう」とは

言われまいだろうし、「おまえのロボットの主観だろう」とは言われまいはずである。それはなぜかということを考えてみよう。

ロボットの主観ではないと考えられる理由は、最初から電子頭脳内に統計計算のためのソフトが組み込まれていて、データを見て、頭の中で集計をして、適切な検定を行なえば良いという指示が、あらかじめ設定されていると考えられるからである。すなわち、統計計算のアルゴリズムは決まっているのだから、全ロボットに組み込まれている統計解析アルゴリズムは同一だろうと普通は考える。このロボットの中にSPSSのバージョン200とか、SASのバージョン100が入っているとか、それを使って計算しているのだろうと考えるので、iRobot5のやり方は非常に客観的だと推論するはずである。

一方、質的研究のテキスト解釈は、ロボットではなく研究者の頭の中で行なわれる。これを主観的であてにならないと考える根拠は、人間の頭脳内の言語解釈アルゴリズムはそれぞれ違うと考えていることによるのだろう。しかし、本当に個人個人の言語解釈システムは異なっているのだろうか。これを違うと考えれば、個人によってテキスト解釈の結果は違ってしまうのだが、これをある程度は同じだと考えるのはそれほど奇妙な考えではない。例えば、入学試験である作家の作品を読ませて、その大意要約や作者の言いたい点を100字や200字で書かせるといった問題があるのは、ある程度はテキスト解釈が人によっても変わらないはずであるという仮定があるためではないのか。少なくとも同一言語内ではテキスト解釈は、個人によってそれほど大きくは変わらないのではないかと考えても良いのではないだろうか。このような考えから、以下に簡単に構造主義的なテキスト解釈論を説明したいと思う。

ソシュールはスイスの言語学者で、言語について構造主義的な考え方を初めて取り入れたことで知られている。1907年から1911年にジュネーブ大学で3回ほど一般言語学の講義をしたのだが、講義後すぐに死んでしまったためその内容は本に

ならなかった。弟子のバイイとセシュエが出席者の講義ノートを寄せ集めて、わからない箇所は自分たちの解釈で出版したため、内容に大きな誤解もあったようだが、それでも構造主義や現象学へ大きな影響を及ぼしている。ソシュールは言葉のシーニュ(語)は、シニフィアン(記号表記)とシニフィエ(意味)がコインの裏表のように一体化しているということを初めて指摘した^{8,9)}。

また、ラング(言語)、例えば日本語はわれわれの頭の中に個々に構築されること、個々の言語はパロール(発話)により社会的に構成されることなどを指摘し、言語が個々人の頭脳に構築されるにあたり、①言語は恣意的であり、②言語は差異のみであり、そして③言語は否定的であることを指摘している^{8,9)}。

言葉が「恣意的」であるとは、語がそうに呼ばれる理由はないことであり、日本語では犬をイヌといい、猫をネコというけれども、外国語では違うことを考えれば明らかである。実は、恣意的とは呼び方だけではなく、猫がどこまで猫なのか(虎は猫ではないのか)とか、犬はどこまで犬(オオカミではなく)なのかという言葉が示す範囲も実は恣意的である。「虹」といえば日本人は7色と思うのだが、英語国民は6色と考え、赤と青の2色しかないとする民族もいる。この意味する点は、「虹」という自然現象でもその認識の範囲は民族により異なり、言葉の意味であるシニフィエの部分も異なっており、同じ現象に対応する言葉だと思っても、実はそれが示す世界は大きく異なることもある。

言語が「差異のみ」というのは、言葉を覚える段階に関係する。例えば、初めて「ママ」という言葉を覚えた子どもは、パパもママと言ってしまう。その時、「ママじゃないよ、パパだよ」と訂正される。「パパ」を覚えて犬が来たときに「パパ」と言ったら、「パパじゃないよ、ワンワンだよ」と教えられる。そして、猫が来て「ワンワン」といったら、「ワンワンじゃないよ、ニャーニャーだよ」というふうに、対象の違いについて、差をとって「否定的」に覚えていく。このようにして、

言語というのは頭の中に構造化されていくと考えられる。

ソシュールの考えにしたがえば、確かにテキスト解釈のための言語構造が心脳構造の中に存在するとしても、それだけでは統計解析におけるロボットの例のような強い主張は困難だろう。

チョムスキーは、MITの教授であり、科学的言語学として初めて演繹的方法論を導入した人物であり、「認知革命」として言語学に非常に影響を与えている。特に有名な彼の考えに「普遍文法」「生成文法」と呼ばれる理論がある¹⁰⁻¹³⁾。

プラトンの時代から「なぜ子どもは、大して語彙も、正しい文法も習わずに言語を習得できるのか?」と疑問に思われてきた。子どもでも4~5歳になると一人前に話すようになるのだが、これは非常に不思議な現象である。すなわち、周りにはいるのは両親ぐらいで、それも正しい言葉を話しているわけではなく、単語を並べたぐらいの言葉しか言わなくても子どもは少し聞いてだけで言語を習得する。プラトンの答は「前世ですでに学んできたからである」というもので、だから頭のいい人と悪い人がいるのだとか、前世で一生懸命やったからできるのだとか、あまり勉強ができれば、来世で困らないように今のうちに勉強しておけとか、そういうことになる。この答えは正しいのかもしれないのだが、反証不能なので科学理論としてはよろしくない。

チョムスキーの答は、「前世」を「遺伝」に置き換えている。すなわち、人間のみが言語を使用できるのは、遺伝的に脳構造に言語の文法規則があるからだというモデルである。これは結構有力な理論で、現在の言語学の中ではチョムスキー理論にもとづく言語解釈が相当に行なわれている。初期の頃の理論では、日本語の場合、「私は、公園に行く」と言うとき、「は」や「に」などは主語や目的語の後ろに格助詞がつく形になっている。「日本青年館で講演を行なう」では「で」が場所を示す「日本青年館」の後ろにつく。このように日本語では、「に」「は」「で」などが言葉の後ろにつく「後置型」である。これが英語だと

「in」とか「at」というのは、場所を示す言葉の前につく「前置型」である。子どもがこのような文を数回聞いただけで、脳にスイッチが入って固定されるという理論である。それほど多くの刺激がなくても、何回か聞くとそれで脳にスイッチが入り、言語規則として固定化されるなどの理論が提唱されている¹⁰⁻¹³⁾。

仮にチョムスキーの仮説が正しいとすると、全人類に共通する心・脳構造が存在することになる。少なくとも個別の言語は普遍文法にしたがってシステム構築されるので、同一言語を話す人間の頭の中の基本的な言語構造は同じ形式になるだろうと期待される。テキスト解釈にかかわる言語の同一性／同型性の仮定が成り立つかは、今のところあまり確実ではないが、仮に普遍文法が存在するのであれば、心脳構造の中に同一の言語構造を仮定して、科学的な理論として、テキスト解釈に関してのモデルを演繹的に発展させることが可能かもしれない。テキスト解釈は主観的かもしれないが、各人がでたためにテキストを解釈するのではなく、ある一定の言語固有のアルゴリズムにもとづく共通システムにより解釈を行なうものと考えられるのではないだろうか。

3. テキスト解釈の今後について

質的研究をより科学的な研究とするためには、テキスト解釈のための「共通理解可能なプロセスの開発」が必須ではないだろうか。極めて困難な作業であるが、研究目的に対応したテキスト解釈を行ない、共通理解可能な解釈プロセスの公共化、マニュアル化が必要なのではないだろうか。量的研究では、統計学は誰でも使うことができる。卒論の学生が修士や博士と同じ解析をやろうと思えばできる。統計解析用のプログラムがあり、ソフトさえ手に入れば、教員が指導すれば簡単にできるし、指導がなくてもできるかもしれない。

一方、GTAは、ある程度マニュアル化されてはいるが、それほど簡単にはできない。また、修正版GTA (M-GTA) もあるが¹⁴⁾、両者の方法は

まったく違っている。方法論的にどちらがより共通理解ができるのかということも吟味する必要がある。科学的な方法論としては、なぜGTAの方法で良いのか、ある程度は説明ができなければならないだろう。このためには、言語の意味とか構造に関する基本的理解が重要だと考えられる。GTAに関する本もたくさん出版されるようになり、テキスト解釈の標準的な方法として確立してきているように思われるのだが、なぜこれで良いのかという理論的な説明が弱い。この点から、システマティックなテキスト解釈の方法論を提唱しているのだが¹⁵⁾、まだ途についたばかりである。

質的研究に関しては、解釈学的アプローチとか現象学的アプローチとかもあるのだが、哲学的な背景からのアプローチが主のように思われる。ウィトゲンシュタインは『4.111 哲学は自然科学ではない』と述べている¹⁶⁾。科学研究の方法を哲学的に説明しても、それだけでは科学的方法論としては適切だとは思われない。今後は、現在の言語学の成果に根ざしたテキスト解釈論が必要なのではないかと筆者には考えられる。

文 献

- 1) 高木廣文：EBMの視点からミックスドメソッドを考える。社会と調査，11：40-46，2013。
- 2) 高木廣文：質的研究を科学する。医学書院，2011。
- 3) ホーキング著，林 一訳：ホーキング宇宙を語る—ビッグバンからブラックホールまで—。早川書房，p. 27，1989。(Hawking SW: A Brief History of Time - From the Big Bang to Black Holes. Writers House Inc, 1988.)
- 4) 池田清彦：構造主義生物学とは何か。海鳴社，1988。
- 5) 池田清彦：構造主義科学論の冒険。講談社，1998。
- 6) 中山康雄：科学哲学入門—一知の形而上学—。勁草書房，2008。
- 7) 戈木クレイグ・ヒル・滋子編：質的研究方法セミナー増補版—グラウンデッド セオリーアプローチを学ぶ—。医学書院，2008。
- 8) 丸山圭三郎：ソシユールの思想。岩波書店，1981。
- 9) 丸山圭三郎：ソシユールを読む。岩波書店，

- 1983.
- 10) 町田 健: チョムスキー入門—生成文法の謎を解く—. 光文社新書, 2006.
 - 11) チョムスキー著, 加藤泰彦ほか訳: 言語と認知—心的存在としての言語—. 秀英書房, 2004. (Chomsky N: Language in a Psychological Setting, Sophia University, 1987.)
 - 12) チョムスキー著, 福井直樹ほか訳: 生成文法の企て. 岩波書店, 2003. (Chomsky N: The Generative Enterprise, Mouton de Gruyter, 1982, 2002.)
 - 13) チョムスキー著, 大石正幸訳: 自然と言語. 研究社, 2008. (Chomsky N et al.: On Nature and Language, Press Syndicate of the University of Cambridge, 2002.)
 - 14) 木下康仁: ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—. 弘文堂, 2007.
 - 15) Takagi H: A Method Structured For Text Interpretation in a Qualitative Study by the Linguistic Structuralism and Semantics, the 12th Annual Advances of Qualitative Methods Conference, Edmonton, Canada, June 23, 2013.
 - 16) ウィトゲンシュタイン著, 野矢茂樹訳: 論理哲学論考. 岩波文庫, p. 51, 2003. (Wittgenstein, L: Tractatus Logico-Philosophicus. 1918, 1933.)

保健の科学バックナンバー

◆特集◆人々の行動変容を促す新たな試み—個人への支援・社会としての戦略— (55巻5月号)

行動変容の準備性をふまえた生活習慣変容の支援

林 美美, 奥山 恵

簡素な飲酒習慣改善法を取り入れた保健指導 足達淑子

身体活動・運動を活発にする技術 宮地元彦

メディアリテラシーと適正なボディイメージの形成

千須和直美

子どもを対象とした食品マーケティングの規制

吉池信男, 佐藤ななえ

たばこ対策におけるナッジ (Nudge) の採用とその限界

大島 明

食品表示一元化と栄養表示の義務化に向けた法的整備

米倉礼子

◆特集◆メンタルヘルスの現状と対策—地域・職場・学校における— (54巻5月号)

地域・職場における心の健康の現状と対策

錦戸典子, 豊田加奈子

学校保健におけるメンタルヘルスの問題 竹内一夫

産業メンタルヘルス対策の最近の動向と

人事労務管理との連携

北村尚人

産業保健師の職務とその展望

五十嵐千代

職場のメンタルヘルス対策における第一次予防

島津明人

心身の自覚症状と死亡リスクとの関連性

浅野弘明

健康チェック票THIによるメンタルヘルスケアの

理論と事例

鈴木庄亮

◆特集◆次世代を育む母子健康手帳 (54巻3月号)

母子健康手帳

中村安秀

産科医がいない地域での新たなチャレンジ

母子健康手帳の利用者は何を望んでいるのか

藤内修二

菊池幸枝, 菊池永菜

学齢期でも母子健康手帳を使い続けたい

小林正子

母と子のいのちと健康を守る, 海外の母子健康手帳

青年期の心を揺さぶる母子健康手帳

井上 栄

篠原 都

(株)杏林書院 発行 詳細はホームページをご覧ください。→ <http://www.kyorin-shoin.co.jp>